

山形国際ドキュメンタリー映画祭 それぞれの視点

2011 ⑤・完

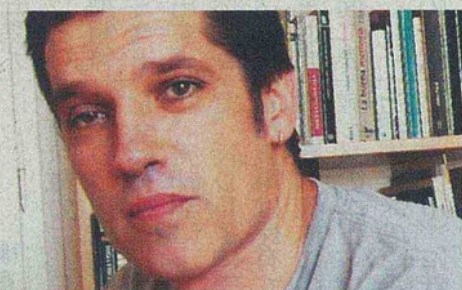
初めての日本、初めての山形。山形国際ドキュメンタリー映画祭と精神を共にするスペイン・ナバラ州国際ドキュメンタリー映画祭「プント・デ・ビスタ」(ナバラ州で毎年開催)の芸術監督を務める私は、いつかは彼の地山形へ、との思いを長く温めていた。そしてついにその機会がやってきた。

ところが、出発の2週間前に事件が起きた。ナバラ州当局が突然、われわれの映画祭に予算の取り消しを申し渡してきたのだ。準備を着々と進めている最中に、資金カットという不条理な事態に直面し、私たちは抵抗することを決意した。映画祭は、ただ予算のつじつまを合わせるためになくせるものではない。世界中の映画作家、観客など、多くの友人たちから緊急支援の声が上がり、数日のうちに世界のドキュメンタリー・コミュニティに広が

った。
国際的な圧力を受け、当局は方向転換を余儀なくされた。私が山形に向けて出発する4日前、隔年開催への変更を条件に、映画祭の継続が発表された。10月5日の朝、バルセロナの自宅を出るときに

ホセチョ・セルダン
スペイン・ナバラ州国際ドキュメンタリー映画祭「プント・デ・ビスタ」芸術監督

た。被写体への執心もさることながら、何よりも社会への執心、そしてもちろん芸術と映画批評を巡るシンポジウムにも登壇した。この体験は、スペイン、日本、アメリカでドキュメンタリー映画の批評について共通する議論が多くあることを教えてくれた。地



▽ホセチョ・セルダン氏は1968年生まれ。ドキュメンタリー映画についての執筆や、映画祭プログラムとして国際的に活躍する。ロビイラ・イ・ビルヒリ大学准教授。北米で有名なドキュメンタリー映画関係者のフォーラム「フラハティ・セミナー」の2012年プログラム選定者を務める。

は、ユーモアのセンスも忘れずに盛り込まれていた。映画批評を巡るシンポジウムにも登壇した。この体験は、

最も重要な集いの場

は、プント・デ・ビスタ映画祭の命運は軌道を戻していた。22時間の旅路を経て、私は6日には山形映画祭開会式に列席していた。

してのドキュメンタリーの手法への執心である。

私は今年新設された「スカパー！IDEHA賞」の審査員として、期待される日本の映画作家に賞を授与するため招かれていた。日本の作品には、ヨーロッパの映画関係者に推薦したいと思える優れたものが多かった。どの映画にも作り手の「執心」を感じ

スカパー！IDEHA賞は早川由美子監督の「さようならUR」に授けた。映画の舞台となる高幡台団地73号棟の住民に寄り添うカメラワークにより彼らとの親密さを描き出す一方で、その同じカメラは権力をかざすUR(旧住宅公団)職員に対抗する武器となる。早川監督の精神力と覚悟を評価した。勇気と繊細さを兼ね備えた政治的な本作に

そして日本以外のアジアの映画も見て、監督たちと語った。誰の口からも、山形映画祭で作品を上映されること

共同体がここにあると確信した。

後にも末永くドキュメンタリー界をワクワクさせ続けてほしい。

(訳・藤岡朝子山形国際ドキュメンタリー映画祭東京事務局ディレクター)

の重要性を聞いた。「ヤマガタ」は今ではドキュメンタリー映画のコミュニティにとつて最も重要な集いの場となっている。翻って、プント・デ・ビスタ映画祭で数週間前に起きたことに思いを巡らせると、ある感慨がもたらされた。

私たちはやっている仕事は何なのか、そして何故やっているのか。山形映画祭の重要性はその傑出した作品選定力と企画力にある。アジア・ドキュメンタリーの近況を知るには2年に1度、山形に足を運ばないといけない。しかしその魅力はラインアップだけではない。ゲスト、スタッフ、そしてボランティアたちが一緒になったときの素晴らしい活力のたまものでもあり、地域や行政の参加の結果でもあるのだ。3月11日に大災害を被った困難な年においても東北の地方都市で開催された、独自性の高い、真に素晴らしい映画祭。今後も末永くドキュメンタリー界をワクワクさせ続けてほしい。

文化